



全国集会で挨拶する藤平副会長

平成三年度の自然保護全国集会は去る六月二十九日(土)、新潟県の新発田市商工会議所四階ホールで開催された。この集会は「日本山岳会の自然保護の基本理念―山を大切に―」を登山について考えようというをメインテーマに、当会越後支部、新潟県山岳協会および新発田市の全面的な支援のもとに、全国から一〇〇名を越す会員が集まり、活発な討議が行われ、基本理念の制定へと極めて有意義な会議となった。

集会開催は午後一時。総合司会は麦倉委員、議長は澤井自然保護委員長。まず集会開催に当たり藤平副会長、佐藤越後支部長、大森自然保護担当理

事の挨拶が行われたが、冒頭、藤平副会長は、「日本山岳会の自然保護もかつての春風駘蕩の時代は去って、現代の複雑化する社会の動きの中で山岳会としても避けて通れない問題となってきた。単純に結論は出せないと思うが、自然保護というこの美しい目的に向かって活発な議論をして欲しい」と挨拶した。

続いて越後支部の筑木力会員による「登山からみた自然保護」と題した基調講演が行われたが、四十分にわたった講演はそのまゝとして「現在の自然保護は楽観論と悲観論が交錯している。しかし登山の場合を考えても登山者がいろいろの困難に向かった場合、悲観論では駄目である。よく状況を判断して知見を体系化し、先ゆき明るい希望をもつことである。その意味で登山と自然保護は相通するものがあると

陰(小西)、宮城(遠藤)、信濃(平沢)、福岡(松本)、石川(太田)、京都(塚本)、宮崎・熊本(石井)、東九州(甲斐)、越後(石田)の十四支部。それによると古くて新しい問題、ゴミ、し尿処理、登山者(観光客)のモラル、各種の自然を守る運動、研修会や自然観察、高山動植物、集団登山などによる山の破壊、リゾート開発に関するもの、景観にかかわるもの、など各地方支部がかかえる現況が紹介されたが、とくに深刻に問題視されたのは全国に広がるリゾート開発(鳥海山のスキー場開発、立山、大台ヶ原、大山などの観光客増加による自然破壊、長野の冬期五輪、阿蘇周辺のリゾート開発など)にかかわるものであった。

以上で前半は終わり約二十分の休憩をはさんで、本題であるテーマ討議に移った。

自然保護全国集会

「日本山岳会の自然保護の基本理念」をテーマに

盛大に新潟県の新発田市で



1991 年 (平成 3 年)

8 月号 (No. 555)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- 自然保護全国集会……………(1)
- 海外の山……………(2)
- 「2人のエベレスト」
- 平成3年度各担当理事の運営方針・新委員の構成について(1)……………(3)
- 自然保護についての紙上討論(第2回)……………(5)
- 追悼・元会員畠中善弥氏逝去……………(5)
- 書籍・雑誌受入れ報告(2~4月)……………(6)
- 日本山岳会所蔵の地図類について(2)……………(7)
- 東西南北……………(8)
- 「アデレードより」「84歳 北極・グリーンランドに行く(2)」ほか
- 図書紹介……………(10)
- 「東北山スキー 100 コース」「山と自然と人間を愛して」ほか
- 報告……………(13)
- 「熊本支部総会報告」「熊本支部春季例会―傾山」ほか
- 自然保護随想……………(14)
- 会務報告……………(16)
- 六月理事会、ルーム日誌、タンボチェ僧院再建協力募金者ご芳名、新入会員(復活)、住所・住居表示変更
- お知らせ……………(18)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

思う」と絶望的な自然保護の悲観論をいましめた。

次の各地方支部報告は、山形(池田・金森)、山梨(北野)、富山(石坂、関西(篠崎、中谷、堀江)、山

お知らせセツフ電話

3234 六六五九

海外の山

二人のエベレスト

テーマは前述の「日本山岳会の自然保護の基本理念」。まず討議を盛り上げる意味で、議長による指名発言で最初に立った羽賀委員は「長年に亘り自然保護行政にかかわった者としてみればJACは極めて大きな存在。だからJACこそ自然保護の発信源としての役割を果たすため基本理念は必要」。ついで本多委員も「山における真の自然保護とは原生林の伐採、道路工事など大量破壊にこそ目を向けなければならない。松方さんなどの諸先輩はずっと以前から提唱してきたことでもありまた自然保護はJACの定款にも謳われていること。現状では怠慢であり、JACは高い立場から早急に基本理念を設定すべき」。つぎに市川委員が資料にもとづいて「JACの自然保護の歴史」について説明(国見委員補足のあと自由討議となった)。

討議をし易くするためまず議長質問の形で「基本理念を持つことは是非」についての賛否が問われ、種々活発な発言が繰返されたが大方の意見は「持つ」ことに対しては賛成であった。しかし、具体的には予め発送してあった準備小委員会作成の原案に対し、「JACの今まで持ってきた理念の再確認(つけ足す)」、「時代に応じた理念を持つべきだ」、「基本理念は自然保護憲章にのっとって作成すべきだ」、「保護す

世界には、エベレスト(チョモランマ)とその他の山がある、と言ったのは誰だったか、ともかく、地球で一番高い場所にひかれるのは、人間の運命的な本性かもしれない。日本では最高峰の富士山三百回以上登った老人を知っているが、八八四八呎の頂きに、六回登ったネパール人(シエルバのアン・リタ。いずれも無酸素登頂で、うち一回は冬季)が出てきた時代である。

東京と盛岡に住む登山家、貫田宗男(四〇)と二上純一(三九)も、一度チョモランマの頂きを踏んでみたいと考えた。できるなら二人だけで、自分のペースでできる登山をやってみよう。

勤務先の理解と、一人「四輪駆動車一台ぐらい」で間に合った費用、それに「五月の一月」という登山期間を中国登山協会が認めたことが、夢を本物にした。「五月の一月」と言いながら、計画は慎重だった。三月初め日本出発、中国経由より経費の安いネパール側からのチベット入域とし、ついでに高所順応トレイニングとしてクーンブ地区の六千呎峰二峰に登った。

四月初旬、カトマンズから陸路チベット入り、そのままいったんチョモランマ・ベースに向かった。米国二隊、英、伊、オーストリア、スエーデン、それに明大隊と七つの隊がいた。ロンブク氷河の末端で八つもの外国パーティーが交歓する時代なのだ。

五月にはなっていないが、七千呎のノース・コル

まで、米隊の協力で高度順応のためにこの時登り、その後カトマンズに。ここで休養し、高所ポーター要員のシエルパたちと共に、今度は正式に五月一日、チョモランマ・ベースからの登山活動を開始した。

五月十五日、八千二百呎地点に第六キャンプ設営。二人がヒマラヤ慣れしていると思うのは、この前後山麓のシガールの町(標高四二〇〇呎)まで二度も下山、短時間だが、低所でしっかり休養をとっている点だ。

二十七日午前一時四十五分、月明かりの中をC6出発。シエルバ自身の希望で二人のほかニマドルジェ、フィンジョが同行した。降雪が夜おさまる気象パターンから、真夜中の登高とした。第一、第二ステップ、さらに三番目の岩場を乗っ越し、午後一時四人が相次いで登頂。二人の宿願は果たされた。

思いがけない結末がこの後待っていた。

四十五分ほどの頂上滞在を切り上げ、下山にかかった直後、最後尾を行く二上の姿が消えた。フィンジョからそのことを知った貫田は、ニマドルジェともう一度頂上に登りかえし、結果、長く計画を共にした仲間のアイゼンの爪痕が東壁に消えているのを確認した。

登頂直後の死は、この山で決して珍しくはない。夫婦で登頂したことで話題となったドイツのシュマツ夫人は、夫と共に帰れなかったし、三回目の登頂を果たした加藤保男は友と共にビバーク中、行方を絶った。無酸素登山をなし遂げた吉野寛、禿博信らも残念なからべースまで下りてこれなかった。

他人の評価によってではなく、「富士山を登るように自分達の満足度ではかる」と考えた、二人のエベレストだったが、惜しくも一人のものとなった。(江本嘉伸)

べき具体的な山名をあげるべきだ」などの種々の意見にわかれた。

これに対し藤平副会長は「公式に理念を制定するのは迷惑だ」という意見も無いこともないし、自然保護に対してはまだまだいろいろ雑多の理解があるように思う。もう少し登山者としての自然保護の問題をしばらく込み交通整理する必要がある」との見解を示した。したがって澤井議長による討議の最後のまとめ(結論)として次の三つの事項が確認された。

- ① 基本理念の必要性は賛成。
 - ② 理念の文案については、憲章にとつとる・先人の理念の再確認・全く新しいものなど支部に持ち帰り検討の上、来年の全国集会で再確認をする。
 - ③ 具体的なJACの行動計画で、残すべき山の指定など出来なかったが、これもあとの検討課題とする。
- 集会の締めくくりは大森理事の閉会の挨拶。会場の都合で午後六時丁度はまだまだ余韻を残しつつも閉会となった。

なお、閉会後は会場を市のカルチャーセンターに移し懇親会となり、まず乾杯、ついで訪れた近新発田市長の「歓迎の挨拶」のあとはまさにフリートークキング。地元の銘酒あり、海の珍味あり、遠来の岳友ありで和気あいあい、盛大な親睦の場となった。

その雰囲気は宿舎として当てられたさすがに荘や青年の家まで持ち込まれた。

翌三十日。予定ではA班(ブナ林の鑑賞と湯の平温泉)、B班(焼峰山登山)にわかれての行動計画であったが、前夜のお天気祭りの甲斐なく大雨。やむなくB班の登山は中止。全員一緒に雨のなかブナ林を観察しながら今だに秘湯のままの湯の平温泉の野趣を満喫し、無事二日間の日程をこなし

平成三年度各担当理事の

運営方針・新委員の構成について(1)

平成三年度の各担当理事の役割分担については五月三十日の新年度第一回理事会において決定。その後各担当理事で検討され、六月十三日(木)の理事会で左記のように説明され了承されたのでお知らせします。

(編者注)(一)内は担当理事、(※)は委員長を示す。

- (1) 総務委員会 (小倉茂・藤井)
- 総務担当理事、事務局の実務を補佐するために
- ① 会員の把握、会員名簿の管理、新入会員のオリエンテーション。
- ② 支部長会議、支部事務局担当者会議

最後に、当初の予定を大幅に上回る参加者のため、急拠会場の変更を伴う受入側の多大なご努力によってこのように盛会裡に無事終了できたことを主催者、参加者側としてここに紙上を借りて深く感謝いたします。

参加者 越後支部、県山協五十一名、自然保護委員(各支部保護委員も含めて)三十五名、一般十五名、計一〇一名

(写真 中村武雄、文・小倉 厚)

の東京開催等、支部とのコミュニケーションを図る。

③ 総会、年次晩懇会など、本会主催の会合の企画、実施。

④ クラブルームを有効活用するためルーム内を整理整頓する。

⑤ 事務局実務の補佐、各種情報サービスをする。

以上を柱に会員サービスを念頭において運営していきたい。

なお、今後のJACをどうすれば善いか? 委員会の中でディスカッションしていきたい。

(委員) 小倉茂暉、藤井正彦、高遠宏

中川武、神崎忠男、石田要久、坂本正智、南川金一、藤田礼子、嶋原一男、松本和貴、堀嘉余子、内藤勇、奥谷潤之輔、岩瀬秀郎、林栄二、中村昭、前田美千彦、中條昌子、高良博人、祝迫重明、袴田通孝

(2) 財務委員会(大倉)

① 委員会活動の費用は、受益者負担を原則とし、予算管理を厳守していきたい。但し価値ある事業については、思い切った判断で支出していきたい。

② 長期的資金計画の戦略的立案。

③ 山研改築、ナムチャバルワ登山の募金活動に対する協力。

④ 各種基金、積立金の効率的運用の検討。

⑤ 各種公的補助金活用に関する研究。

なおこの二年間は、複数の特別プロジェクトがあるので、各担当理事の協力をお願いしたい。

(委員) 大倉昌身、山本健一郎、高遠宏、橋本清、西村政晃、板倉健二

(3) 会報編集委員会(小倉厚)

ナムチャバルワ、山研、HATJの三大プロジェクトを優先的に取り扱うことを大方針に、会員と会との潤滑剤になるようにしたい。

(委員) 小倉厚、小倉茂暉、高田真哉、江本嘉伸、細井澄子

(4) 山岳編集委員会(南川)

平成三年度は、担当者交替で、原稿依頼が遅れているので、当面は従来の編集方針の延長でいきたい。既に「追悼文」、「支部だより」等は依頼済みであるが、海外登山、研究報告、書評、山岳史等を柱に、年次晩餐会に間に合わせる様努力したい。

〔委員〕南川金一、高遠宏、佐藤皆子

(5) 図書室管理委員会 (小倉茂)

早急に旧図書委員会と実務的な引き継ぎを行い、滞っていた受け入れ、登録、会報への紹介を行うようにしたい。次に新委員会としては、何故図書の整理が滞っていたかについて検討を行い、ルーティンワークの改善を行うと共に利用し易い山岳専門図書館を指向していきたい。

当面の課題としては図書の総目録を作成し、この目録を基に、欠番書籍、雑誌をチェックし、所蔵すべきものは補充する。寄贈が困難であって所蔵すべきものは購入。雑誌、部報、報告書は欠番を埋める努力をするかたわら、種類も増やす。地図類についても充実を図り、できれば山岳地域の二万五千分の一地形図は現用のものを揃えたい。

なお、「図書室だより」を会報に新設し、新刊案内だけでなく、広く図書・出版関連の情報を提供したい。

〔委員〕小倉茂暉、望月達夫、大島輝

夫、水野勉、五百沢智也、児玉茂

(6) 山研委員会 (石橋)

山研改築特別委員会とは別に、従来の管理責任がある。旧山研最後の年というところで利用者も多くなること予想され、島田満氏の健康状態も考慮しつつ運営に当り度い。

〔委員〕石橋正美、高山忠四朗、太田晃介、上條岳人、岡部みち子、中村太郎、上條輝夫、上條敏昭、坂本正智、奥原廣次、奥原幸、青木保良、継松久美男、堀嘉余子、井野千枝子、溝口洋三

(7) 高所登山研究委員会 (重広・伊丹)

①本年度はナムチャバルワ登山の実施の年にあたるので、これにつける。

②ナムチャバルワ登山隊支援のトレーニングを二隊計画しているが、科学的にみて興味のある場所なので、スベシャリストを優先して人選に当たりたい。

③海外登山基金の交付を受けて実施した登山隊等の報告会を開催したい。

〔委員〕重廣恒夫、伊丹紹泰、川上隆、田村扇一、阿部和行、中島道郎、野村哲也、松永敏郎、大森薫雄、原眞、斉藤惇生、宮下秀樹、神崎忠男、松島静吾、湯浅道男、高橋善数、遠藤京子、

広島三朗、中村進、鹿野勝彦、平野隆司、早坂敬二郎、渡辺雄二、磯野剛太、長谷川恒男、山本一夫、佐藤知恵子、

江本嘉伸、三谷統一郎、賀集信、柳沢

昭夫、堀井昌子、松本正城、神長幹雄、大西宏、山本宗彦、山本篤、高見和成、佐藤正倫、片岡泰彦

(8) 集委員会 (入澤)

従来と変らない路線ですすめたい。最近各委員会や支部でも各種の山行を行っているので、その隙間を埋めるような計画を考え、とくに中高年対象の現地小集会も計画したい。

〔委員〕入澤郁夫、川善市、高澤英雄、小松原一郎、勝山康雄、神山良雄、渡辺立男、中村久美子、継松義彰、鈴木快信、湯本一彦、柳下棟生、水村通子、齊藤幹雄、平井順子

(9) 指導委員会 (片岡)

例年通り、秋に岩登り、春に山スキーの講習会を開催したい。他に沢登り等の講習会も考えたい。

〔委員〕片岡泰彦、小林政志、渡辺雄二、磯野剛太、降旗義道、大谷亮、熊崎和宏、加藤峰夫、西村哲、高尾文雄

(10) 資料委員会 (山口)

明るい委員会を心がけ、財産の保全、保存価値のある資料の確保体制を確立したい。また資料蒐集のための人脈づくり、資料としての価値判断基準のマニュアル化を行いたい。

なお、会員各位には、機会ある毎に資料を公開する機会を作り度いと考えている。

〔委員〕山口俊輔、中村純二、佐々

保雄、坂倉登喜子、平柳一郎、織田沢美知子、田畑真一、梅野淑子、原謙一、高田眞哉、遠藤光男、藤井正彦、井沢信久、鈴木敬吾、佐藤登代子

(11) 科学研究委員会 (大森)

当面は、事業計画にある、探索山行セミナー、シンポジウムを行うが、将来的には、科学調査隊が出せるよう勉強から行動へ!! を目標にしたい。

手始めにナムチャバルワトレッキングには、積極的に参加していきたい。

〔委員〕大森弘一郎、徳久球雄、鳥居亮、松丸秀夫、川喜田二郎、中村純二、千葉重美、高遠宏、中川武、齊藤桂、梅野淑子、石田要久、宅間清子、小西奎二、大木淑子、高橋詢、五百沢智也、森武昭、石井恵美子、奥野道治、奥山巖、大友裕美、有井琢磨、大蔵喜福、木村かずみ、近藤雅是

(12) 図書委員会 (山本)

山岳図書の文化的な面(山岳史懇談会、山岳図書を語る夕べ、この一本展、書評等)を担当する。

〔委員〕山本良三、大橋晋、島田巽、近藤信行、岩淵泰郎、北島光子、河村栄二、堂本暁子、伊藤博夫、越田和男、田村俊介、大森久雄、松家晋、岡沢祐吉、岩瀬皓祐、飯田進、平井吉夫、小川益男、三栖寿生、細井澄子、川合周、南井英弘、泉久恵、三好まき子

(以下次号)

村木前副会長「自然保護講演会」

についての紙上討論(第二回)

自然保護委員会

第一回討論で私の講演について様々な意見を頂戴した。答えをのべる前にもう一度、話の主旨を繰返させて頂く。

「自然を床の間の飾り物的に考え、

追悼

元会員 畠中善弥氏逝去

元会員畠中善弥氏(会員番号二〇

二番)は本年六月二十日、山形県吹浦の自宅で逝去されました。鳥海山の紹介に尽くされ季節を問わず鳥海に親しみ、吹浦登山口二合目に小舎を建て吹浦郵便局長在職中は小舎から出勤したことが幾度もあったそうです。今上陛下の皇太子殿下時代、東宮御所でスキーや山や植物のお話をされたことや、高松宮様のスキー登山ご案内は、永年の鳥海山への思いが実るときだったと思います。

麻生武治氏、黒田初子氏等、横有恒元会長の筆による「畠中小舎」の標札がかげられた、近代的とはおよそ程遠い土間と炭のこたつのある小

ありのままにそっとしておくという立場はとらない。自然を人間社会との関わりの中でとらえていき度い。そのためには大所高所からの第三者的な自然保護論ではなく、登山そのものの、登山

さな木造の家の部屋で、語らい泊まった大勢の山岳会の先輩の方々、ランプの下で小さな芳名帳をめくり、その方々すべてに同行なさった畠中さんのお話は限りなく楽しく、気圧計を気にしながら明日は暗いうちからスキーについて頂上を往復するとうの、思わず時を忘れることばかりでした。宮林署からの借地は個人には一代限りとのことでご存命中に自身で小舎をとり壊されました。

天皇陛下より、ご逝去に際し、侍従を通し、弔意を伝えられたとのことでございます。

高松宮様お手植の柿の青葉の茂る傍のご自宅でのご葬儀は六月二十三日、大勢の方々に見送られ黄泉の国に旅立たれました。(穴田雪江)

者も自然破壊の一因であるという自覚を出発点として自然保護を考えていき度い。」ということであった。やや具体策に欠ける点があったと思っているが、立場をはっきりさせたかったからである。それに対する賛成論には特別にお答えはしないが、なぜ今さらそんな漠然とした総論をのべたのか、具体論をのべよというご意見が出されていた。また、当日、日本山岳会としてはどうするかというご質問もあったと記憶しているが、それらに対する私の考えを述べたい。

(一) 自分の狭い経験からであるが、これ迄の自然保護運動の大部分は自然があるがままに保存しよう。森林を例にとれば自然林を尊重し、造成林、二次林は価値がないかの如き立場の議論があったようにも思う。造林の下草刈りすら不可とした極端な自然保護論があったとも聞いている。山岳会の自然保護の歴史は古く、大きな成果を挙げてきたが、ややこれに近い傾向もあった。しかし、著しく登山人口が増加し、しかも高年齢者が多くなり、交通機関や各種施設の恩恵に浴した登山があたり前になった今日、それなりに自然保護の視点を少しは変えるべきではないかと考えたからである。また、自然破壊・環境破壊は経済的な慾望や、人間の恣意によって行われる場合もある

ろが、世界的に見れば爆発的な人口増の結果として森林が消滅し、砂漠化が進み、水資源への悪影響が現れている場合が多い。ヒマラヤの自然保護を訴える「HAT」の運動も登山者が自ら持ち込んだ物の持ち帰りや、清掃に努め、登山を中心にヒマラヤの環境保全を目指すことは素晴らしいが、ネパールを始めとするヒマラヤ山域の環境保全がそれだけで達成される訳ではないことはお分かりであろう。今後十年間で十億の人口増加があり、その大部分はアジア地域だと予想する九一年度版「世界人口白書」からも容易に推察されることである。従って登山者による自然保護として自らの足下、踏跡を正すことは当然で、直ちに実行すべきことであるが、それだけで問題が解決する訳ではなく、単なる反対論、環境論ではなく、経済的・社会的な問題として考えていかなければならないのではなからうか、という提案である。

(二) 奥岩菅の問題について、最初に山岳会内部の事務処理に不手際があつて当時、世の誤解を招いたことは深くお詫びしなければならぬ。幸いに反対運動が功を奏してご承知のような結果になった。しかし、長野冬季オリンピック招致委員会は計画を変更したとはいえ、あの山域の大部分は和合、共益両組合によって管理されている私有

地である事実は変わらない。地元の人達がその私有地を経済的活性化に利用しようと考えているとすれば、反対運動は問題提起の出発点であり、今後は地元の意向を聞きながら、どのようにして自然保護と地元活性化の両立を計ることが出来るかが重要なのではないかと考えている。

(三) 最近の具体的な事例を挙げ「こうすべきだ」という提案を示せというご要望があったが、私にはそのような大それたことはできない。

ただ、白馬山麓や鈴蘭での無秩序なペンションの乱立をみると聊か呆然たる思いである。

これからの計画について強いて私見をのべれば、も早、単なる反対ではなく自然と調和し、村起こしの効果が上がるような総合計画ができるように地元の村や町を応援し、啓蒙する時代ではなからうか。もちろん、絶対開発をゆるすべきではない山や地域はあろうと思う。

(四) 最後に山岳会としての自然保護に関する方針政策について、もちろん、私にはその資格も能力もない。しかしなるべく早期に確立する必要がある。そして方法論になると各人各様である。会社のC・I・運動ではないのだからマイノリティの意見も聞き十分な調整が必要ではなからうか。自然保

書籍・雑誌受入れ報告

1991年2月

- | | | | |
|----------------|------------------|-------------|--------------|
| 1 西川一三著 | 「秘境西域八年の潜行(下)」 | 中央公論社 | 1991 (発行者寄贈) |
| 2 小田部 学著 | 「山から谷へ 薬系技官の記録」 | 日本医事新報社 | 平3 (著者寄贈) |
| 3 えびのビジターセンター編 | 「霧島屋久国立公園 霧島の自然」 | えびのビジターセンター | 昭61 (発行者寄贈) |
| 4 日本山岳会東九州支部編 | 「登山ガイド 大分百山」 | 日本山岳会東九州支部 | 1991 (発行者寄贈) |
| 5 京都山岳会編 | 「京都山岳会新青峰登山隊報告書」 | 京都山岳会 | 1990 (発行者寄贈) |

書籍・雑誌受入れ報告

1991年3月

- | | | | |
|--------------|-----------------------------|------------------|--------------|
| 1 JR 関東山岳連盟編 | 「うるわしの岳 台湾玉山登山報告 90-6」 | JR 関東山岳連盟 | 1990 (発行者寄贈) |
| 2 チボリ・セケリ著 | 「アコンカグア山頂の嵐」 | 福音館書店 | 1990 (発行者寄贈) |
| 3 宇江敏勝著 | 「熊野草紙」 | 草思社 | 1990 (発行者寄贈) |
| 4 串田孫一著 | 「山のパンセ」 | 集英社 | 1990 (発行者寄贈) |
| 5 毎日新聞前橋支局編 | 「尾瀬 その風の中に」 | あさを社 | 1990 (発行者寄贈) |
| 6 吉川栄一著 | 「沢登り 入門とガイド」 | 山と溪谷社 | 1990 (発行者寄贈) |
| 7 坂口 豊著 | 「尾瀬ヶ原の自然史」 | 中央公論社 | 1989 (発行者寄贈) |
| 8 佐古清隆著 | 「初めての富士登山」 | 文化出版局 | 1990 (発行者寄贈) |
| 9 山里寿男著 | 「山の絵の描き方」 | 東京新聞出版局 | 1989 (著者寄贈) |
| 10 武甲山総合調査会編 | 「秩父武甲山総合調査報告書 上中下別冊 123 付図」 | 武甲山総合調査会 | 昭62 (購入) |
| 11 丹水会編 | 「丹水 十周年記念誌」 | 日本山岳会丹水会 | 1990 (発行者寄贈) |
| 12 岡 秀郎著 | 「立山からチベットへ わが山旅の日々から」 | 山と溪谷社 | 1991 (著者寄贈) |
| 13 手塚宗求著 | 「新編 遼道の山」 | 恒文社 | 1991 (発行者寄贈) |
| 14 飯田睦治郎 | 「山の天気 Q&A」 | 東京新聞出版局 | 1991 (著者寄贈) |
| 15 日本ヒマラヤ協会編 | 「もう一つのチベット 桃原郷への山旅 シャリ峰登山」 | 日本ヒマラヤ協会 | 1990 (発行者寄贈) |
| 16 日本ヒマラヤ協会編 | 「中国登山の手引き」 | 日本ヒマラヤ協会 | 1990 (発行者寄贈) |
| 17 岡田 昇著 | 「壁 WALL」 | 情報センター出版局 | 1990 (発行者寄贈) |
| 18 坂原忠清編 | 「Broad Peak」 | 川崎市教員登山隊スピダーニエ同人 | 1990 (著者寄贈) |

書籍・雑誌受入れ報告

1991年4月

- | | | | |
|------------------|-------------------|--------|--------------|
| 1 新妻喜永著 | 「花の山旅・日本アルプス」 | 実業之日本社 | 1991 (発行者寄贈) |
| 2 蜂谷緑・小俣光雄・山村正光著 | 「甲斐の山旅・甲州百山」 | 実業之日本社 | 1991 (発行者寄贈) |
| 3 工藤隆雄著 | 「富士の見える山小屋」 | 実業之日本社 | 1991 (発行者寄贈) |
| 4 牧 潤一著 | 「初心者のための淡彩・山の描き方」 | 日貿出版社 | 1991 (発行者寄贈) |
| 5 若林岩雄著 | 「親山遊谷」 | 白水社 | 1990 (発行者寄贈) |
| 6 根深 誠著 | 「ブナの山々」 | 白水社 | 1990 (発行者寄贈) |
| 7 H. ハラー著 | 「チベットの七年」 | 白水社 | 1989 (発行者寄贈) |
| 8 下関山岳会編 | 「稜線 2」 | 下関山岳会 | 1991 (発行者寄贈) |
| 9 下関山岳会編 | 「稜線 60 年史」 | 下関山岳会 | 1991 (発行者寄贈) |

護も人間が介在し、経済問題がからむと白か黒かの単純論議ではなくもう少し幅のある討論や妥協も必要になってくる苦である。

(村木潤次郎)

追記 以上舌足らず、的外れの処もあるが、できる範囲でお答えした積もりである。また、自分の都合で大変遅れてしまったこともお詫びしたい。しかし書きながらこの紙上討論という形式は自然保護という単純そうで複雑な問題を論じるには少し無理ではないかと思いついた。今後さらに何か結論めいたものを得ようと考えておられるならば十分意を盡す自信もないし、それ程簡単なこととも思えないのでこの辺でご容赦願いたいと考えている。

* * *

自然破壊者であることの自覚を皮肉的にいえば、日本山岳会の中に自然保護委員会があること自体ある意味では変なことである。

真の自然保護は口という程生やさしいものではない。その前に個人個人で考え、しなければならぬことが山程ある。その一つ、われわれ登山者はひどい自然破壊行動を直接してきた、そしてしているという自覚。では自然破壊を極力最小にする山登りをいかにするか。ここが出発点だと思う。そういった山登りを地味に実践している人達がいる、そういう人々の集団、また

個人が始めて外部に対して強い説得力を持つ。これは村木氏のいつておられることにもそのままだてはまることである。さらに、「自然」は未知の事柄、解明されていない現象が非常に多い(神秘性)。それゆえ生半可なお題目の列挙では実にならない。その間にすざましい自然破壊が毎日進んでいる。

(笠井 篤・五〇〇九)

日本山岳会所蔵の

地図類について(2)

児玉 茂

日本山岳会には「豫察地形図」全五枚と「地形詳図」七十一枚が所蔵されています。地質図は「豫察地質図」が二枚、「地質詳図」は南西日本を中心に五十三枚が所蔵されています。

五万分一地形図は明治二十五年に着手以来、三十二年間で国内分が完成しますが、この間に領土獲得や植民地統治、国境線の確定等で測量製図作業が樺太、千島、台湾、朝鮮、満州等に展開していきましました。外地の地形図はもっぱら軍事と支配機構の要請に答えるべく作製されました。

樺太では日露戦争直後にポーツマス講和条約に基づいて、日露両国による国境画定測量が行われますが、その後明治四十年代に境界画定委員および臨

時測図部によって假製版五万分一地形図が、北緯五十度線以南の海岸線と内陸の川筋について作製されました。日本山岳会には全海岸線をカバーする九十六枚が揃っておりまします。この假製版は図郭内に空白が多く内陸部の測量精度はスケッチに近いもので「北海道假製五万分一」にも似ています。

明治八年に千島・樺太交換条約によって日本の領土となった千島列島は、大正初期より海軍水路部の協力を受けながら北端のシュムシウ島から測図が開始され五万分一地形図が作られています。クナシリ島、エトロフ島等の南千島は北海道から測量網を延長し大正末期に完成しますが、市販はされていません。日本山岳会の所蔵はシュムシウ島からウルップ島までの五十二枚です。

朝鮮と台湾の五万分一地形図は朝鮮総督府、台湾総督府がそれぞれ所管となり大正初期より測図が始められました。地籍測量の必要もあり、夫々に臨時土地調査局が設置され、また多数の測量員が動員されて短期に完成しました。所蔵する五万分一朝鮮地形図の中に「交通図」と呼ばれる三色刷りの、川筋と道路と地名のみの絵地図があり白頭山周辺の国境付近と港湾等軍事的要地で作られていました。ちなみに白頭山周辺には「略図」と呼ばれるス

ケッチに近い地形図、「假製版」地形図と二色刷り「正式」地形図もできています。

台湾の場合は山岳地が多いため測量は難航したとされています。所蔵の二十五枚は大正末から昭和二・三年の測図で緯度が低い図郭が横広になっています。山岳地帯では「地上写真測量」という新技術も併用して作られています。新高山や「阿里山」図幅はルートマップのようで、ルート上から測量できる範囲以外は空白部のままです。

国内の五万分一地形図にも色々珍しいタイプの地図があります。戦後の地形図は墨一色が普通でしたが、明治三十三年式図式の地図群のなかで褐色、藍、墨の三色を用いたものがあります。この色刷りの地図群は約二十年間だけ発行されて以後中止されました。日本山岳会には九州地方を中心に同年測量の地形図で、発行年が一・二年ずれた墨と三色の二種類が一・二セット揃っています。値段は三色の方が高く十二銭、墨は七銭五厘か八銭五厘といわれています。

太平洋戦争末期にアメリカ陸軍地図局(AMS)が作製した軍用地図群がありますが、これは陸地測量部の五万分一地形図の上に地名のローマ字読みを載せ、千ヤードのグリッドが掛けて

あるコピー地図です。

戦争時の地図ではさらに興味深いアメリカ製の地形図「SHIZUKA」があります(一九四五年発行)。主要都市について他に何枚かが作製されたと思われませんが、五色刷の五万分一として発行されています。注釈によれば二万五千分一地形図や海軍水路部の海図などを資料として使い、一九四五年の空中写真から図化された地形図です。記号はアメリカ式、植生分布も細かく表現されています。各軍需施設も明示され、さらに驚くべき点は静岡市街の爆撃成果が図示されていることで、すーアメリカ軍は爆撃しながら同時に地図作製の写真も撮影していたことがわかります。

現在の、二万五千分一による地形図を基本とすることに決定したのは昭和三十九年ですが、五十年以上も前の明治四十年代にも部分的にはあります。二万五千分一地形図が作製されています。現在の二万五千分一地形図は全て空中写真と図化機で作られています。明治期のものは平板測量の手作りです。日本山岳会が所蔵する二万五千分一地形図は大部分が「假製版」で東北から九州にかけての主要都市、軍事的要地点一五七枚があります。必要部分を短時間に作ることからきているので、図郭内に空白部が多く、例

えば小千谷近傍の「中野」図幅のように八五%が空白というものもあります。また最もユニークなものは四枚の図幅を使って全体の三十%にすぎない日光・中禅寺湖・男体山の部分だけを製図したものが 있습니다。この時代の山岳地の地形図は珍しいものだと思います。

編集図

編集図作製の目的は、広い地域の全体を把握するため、1 既成の各種地図から編集したもの、2 実測図を縮小編集したもの、の二種類があります。

日本山岳会所蔵の編集図は、実測図の場合と同様に陸地測量部、北海道庁農務省地質調査所、朝鮮総督府発行のもので、

陸地測量部の「輯製二十万分一」は明治十九年から二十六年までに北海道沖縄、南西諸島、小笠原、千島を含む日本全土が完成しています。図郭の範囲は経度一度、緯度四〇分、墨一色で地形表現には「ケバ」が用いられています。この時代にあたっては、資料としての実測図はまだ限られていて、文政四年(一八二一年)に作製された伊能忠敬の『大日本沿岸実測圖』も使われています。

△ △ △

— 続く —



アデレードより

中村テル

今、名誉会員を囲む会の写真と、親切にお寄せ下さいました「寄せ書」を拝見して、古い山友達のあの方、この方、このことをじっくりと思い出していきます。私はいわゆるホームシックなど、しおらしいオセンチにはなりません。が、シーズン毎に、晴れた蒼い空をみ、樹木の紅葉を眺めると、秩父の山や上高地、そしてうっすらと雪をいだいた初冬の北アルプスを思い出すと泣けて泣けて仕方がありません。こんなにも日本の山や景色が、私の心の奥までしみこんでいるとは気がつきません。でもどこにいても人間はひとりぼっちで淋しいのですが、私には山があるからこたえないなどと、威張っていた娘時代を思い出し、なんてギザなことを言った、おてんば娘であったかと我ながら恥ずかしく、皆さまにお詫びを申し度い気持ちでいっぱいです。

名誉会員の方々が元気でお集まりになれたことは、JACがまだまだ健在であり、古い歴史をもっている何よりの証拠です。

私などは名誉会員になる資格はありませんでしたのに、押しかけ女房みたいな存在で、ズーズーしくいすわっていたようなものです。しかしそこがズーズーしいおテルさんのこと、そんなことを気につけないふりをして、なにかとお手伝いしているふりをして、今日まで無事にすみました。これから、本当にお手伝いをし、とくに国際会議などの際は、いくらでも陰でお力になり度いと思いますので、遠慮なくお申し付け下さいませ。

ここアデレードは、人件費と税金の高い国で、山こそありませんが、自然の美しい街です。公園の中に街があるような田舎都市ですが、大体皆さまは私に親切にして下さいませ。

八月十二日〜九月二十日頃までは、日本航空とカンタスの共同企画で、家族呼びよせプランという成田・アデレード直行便(二六、〇〇〇円)往復があります。(日本で円で払えばよいそうです)どうぞみなさま、私の娘や息子、孫になつていらしていただけると嬉しいのですが……

(五月二十四日付、松田氏宛)
(編集注) 名誉会員、中村テル女史宛

は、オーストラリアの永住権をとられ
単身、アデレードに渡り、生活されて
います。連絡先は左記の通りです。

Tel Nakamura Satow SATOW
House, 12 George st., Unley Park
Adelaide, S.A. 5601, Australia

八十四歳

北極・グリーンランド

を行く(2)

岩本美津雄

グリーンランド・カナック滞在中の
四月二十八日、犬橇でフィヨルド探訪
に出た際、出発時には全く気づかな
かったのですが、同じルートの帰路、
休憩中に私は犬橇を離れて百メートル程の所
で雪面から片足がずぼりとはまり込
み、びっくり仰天しました。この帰路
は所々に氷雪面が持ち上っており、こ
れが氷の割れ目、即ちリード帯で、こ
のリードの幅がだんだんと広がり、し
かも何日も続き、犬橇が渡れなくなり、
行くも帰るもできなくなり、氷の島の
中で立ち往生となります。この氷原の
下は深海であること、しかも一定の方
向に向かって海流の動きがあることを
痛感し、山とは異なった、身震いする
ような恐ろしさを感じました。

北極圏は少々乱水があっても平原な
ので見通しがいいと油断するのは禁

物。ツアーには経験豊かで老練な現地
のエスキモー案内者に従うこと。彼ら
は氷の割れ目に對し、いずれの方向へ
行ったら安全に渡れるかを判断してく
れ、その都度、現地において知恵をし
ぼって適切な方途を考え、無事に渡し
てくれると思います。犬橇のルートの
下には往きも帰りも深い深い海である
ことをわすれてはならないでしょう。
この氷の割れ目が四月下旬から、あち
こちに頻繁に発生しますから特に注意
を要します。

シオラバルク(美しい砂浜という意
味)村。氷点下五十度、吹きつける地
吹雪ブリザード、四ヶ月間太陽が顔を
出さないランプ生活、厳しく且つ貧し
いこの地球最北の集落。そこで、この
大自然に一生の夢をかけておいでの日
本人、大島育雄さんにお会いすること
が出来ました。彼は日本大学生産工学
部出身で、同大学の山岳部OBです。
グリーンランド西北に隣接しているエ
ルズミア島の最高峰を目標にここシオ
ラバルクにて気象関係、その他極地の
環境体験などのためこの地に住みつ
いて十七年になると聞きました。大島さ
ん(四十三歳)にはエスキモーの奥さん
アンナさん(三十八歳)と十四歳の長
女を筆頭に一男四女がいて家族の生活
資源、食料、衣料などを得るために否応
なく猟場を駆り立てておりました。気

がついたら「猟師であった」「猟師でし
かなかった」ということでした。振り
返る暇もなく追いまくられるように生
きてきたせいかもしれないが、好きな
ことを夢中でやってこられたというこ
とも確かでしょう。「開き直りめいた満
足感を覚えた」とも申され、大島さん
の人間としての純粹さに感動させられ
るものが多々ありました。

私は学生時代から、険しい岩山、厳
冬期への挑戦を続けてきたものです。
社会人になって以降は子育て等による
中断期はありましたが、高齢者といわ
れるようになって以降も、高山への挑
戦を繰り返していました。一九七九年
齡七十二歳には、ヒマラヤ・カタパ
ールピーク(五五八〇呎)登頂、そ
の後毎年、外地の五千、六千呎突破
級の山を目指し、登ってきましたが、
一九八九年に自宅近くの坂道を自転車
でトレーニング中に転倒、危うく片肺
になる事故を起こし、その後は「高山
はもう無理か」と挑戦の目標を「垂直
から水平」に座標の基軸を変えていま
した。そこへ、和泉さん案内の氷原旅
行プランを知り、「グリーンランドの犬
橇……」と夢を巡らしたのです。普陀
落世界を思わせるシオラバルクの荘嚴
な風景を頂点に、文字通り一期一会の
貴重な体験の多いツアーであったと思
います。

—終り—

燧岳と至仏山

川崎精雄

九月二十九、三十日イサベラ・バー
ド(日本奥地旅行)の南会津の峠と村
を訪ねて帰京し、二日おいて十月三日
尾瀬に行った。二年ぶりの長蔵小屋は
紀子さん山行で不在、小淵沢田代を歩
いた程度で、折からの十五夜も雨とな
り、早寝した。四日は雨と強風の中を
燧越えしたが、頂上の荒廃は言うに及
ばず、撫平への降路の沢筋がひどくえ
ぐれているのに驚いた。

登路の長英新道には思い出がある。
昭和九年の春単独スキー行で、会津駒
に登った後尾瀬に戻り、ナデックボか
ら燧に登頂して、この尾根を滑り下り
た。沼辺の小屋に戻り、折から現在の
長蔵小屋の設計図を睨んでいた長英さ
んに話すと「よい尾根を下りました
ね」と言った。これがヒントになった
わけでもあるまいが、後年彼はそこに
登路を作った。

私の最初の尾瀬行は昭和四年(一九
二九年)の秋で、利根側檜俣の谷から
至仏山腹をへずり原に出て、夜十二時
に沼に着き、長蔵老人を驚かした。そ
の頃の尾瀬は正に神苑で、あまりの静
けさに涙が出る程だった。沼の面を翔
つ水鳥の羽音も聞こえそうだったし、

湿原を歩けば土が揺れ、草の中からざくざく湧く水が、ズボンの膝上まではね上がった。道標も殆ど無かった。

今回の旅は紅葉が見頃だった。二日後に、婦人懇談会全国集会在長蔵小屋で催され、百数十名が宿泊のことを早川瑠璃子さんから聞いていたので、若し私が同夜泊だったなら、長蔵老人の印象をはじめ、古い頃の尾瀬はもろろんのこと、尾瀬を繞る銀山平の溪谷や美人郷といわれた藤原、秘境だった松枝岐など話して上げられたのに、と少し残念に思った。昔の尾瀬を知る人が少なくなった今、伝えて置きたい気がする。

十一月十二日に鳩待峠から至仏に登った。雪と強風でいきなりの冬の寒さがこたえた。特に稜線に出た時の利根側からの強風には、あと二た月で八十四歳の私は飛ばされそうだった。

私のこの山の登頂は昭和五年(一九三〇年)の秋だから、ちょうど六十年前(この年長蔵老人没)で、越後駒、銀山平、尾瀬、藤原の山行だった。無論登路はなく、山の鼻から猪沢を遡り、上部は岩間を埋める道松や矮樹などと格闘したのだった。(この頃清水トネルは出来ていない)

その後昭和八年春平ヶ岳の帰りと、九年春、十一年春と、いずれもスキーで至仏、笠を越えて藤原に出た。その

頃出来た山の鼻からの登路は、無雪季に登っていないから知らない。鳩待峠からの登路の立派さ? はかねて見ていたが、私がかかなり苦しんだ笠から藤原への尾根にも、明瞭な街道が出来ているのに啞然とした。

至仏山頂は見えない方がいいですよ、と年下の岳友が忠告してくれたが、全くひどい荒れ方だ。私には最初の面影があるからきつい現実だが、山の鼻登路を作った時点で、当然予想されたことである。今になってその登路を閉鎖しても遅い。これは至仏に限らない。燧頂上にしてもナデック一本だった登路が今は五本で、これで荒廃しなければ嘘であろう。

ともかく私は現実を目をつむって、花の豊富な頃、また至仏を訪れてみたと思う。(一九九〇 十二月記)

北岳への外人初登頂者は

田畑真一

表題の登頂者はW・ウエストンということになっている。明治三十五年八月のことであった。これは確かな記録(ウエストン『日本アルプス―登山と探検』)によるもので、言うなれば定説である。我が日本山岳会の関係文献(W・ウエストン年譜・その2、「山岳」第八十三年)にみる通りであ

る。

しかし、私は明治三十二年七月に、すでにオーストリア人公使夫妻による登頂記録があるとみられる資料に出合った。それは北岳(三一九二呎)を村内にもつ山梨県中巨摩郡芦安村(望月義清村長)で発刊された『芦安村・歴史散歩』である。関係記事をあげる。と「明治三十二年七月には、オーストリア人公使夫妻を芦安村大曾利の深沢伝十郎、清水駒吉、清水弥吉、清水高次郎、清水巳代松の五人が、案内人として北岳に登った。その時には、山頂の祠に、金色の仏像があったと伝えられている」となる。私は芦安村を訪ね、記事を執筆された元村長・深沢政輝氏に対し、出典について尋ねた。深沢氏によると、先人・鈴木喜太郎が生前に話していたことを書いたとのこと、年号と月、案内人がフルネームであることなど信頼度が高いと思われる。五人の案内人のうち、二人までは孫が芦安村に在住している点も確認した。それでオーストリア大使館に問い合わせたところ、ベーター・ハンツァー著『日本オーストリア関係史』(竹内精一・芹沢ユリア訳)により、当時の公使がクリストフ・フォン・ヴェーデンブルック伯爵であることが判明。さらに国立国会図書館にも問い合わせたところ、宮内庁編『明治天

皇紀』により、同伯爵の任期が明治二十八年九月から同三十二年十月までであることも判明した。

ただ、同伯爵の略歴、特に登山家であったかなどは一切が不明である。外務省外交資料館などにも問い合わせ中であるが、現在のところ回答がない。願わくは有識者各位のご教示などが頂けないものかと夢を追う昨今である。



図書
紹介

東北スキー一〇〇コース

奥田博・伊藤繁著

東北の山は、積雪の少ない阿武隈山系を除くと、全てスキーが可能で、新しい尾根を見つけて滑る楽しさを、この本は教えてくれている。

三月号の図書紹介にもあったが、百名山を初めとして、観光地、峠、滝等、各種の百選が数多く見られる。それにしても北は岩木山から南は燧岳まで、一〇〇コースを良く滑ったものだと感じする。

体裁は、見開きに一コースと定型化されていて、大変見易く、挿入され

ている写真も、奥田氏が東北山岳写真家集団同人でもあって、迫力のあるものが載せられている。

前書きでも言っているが、これは単なる案内書ではなくて、著者等の滑降記である。その時の状況が短い文章の中に良く出ていて、読み物としても面白い。しかし本書の読者は、やはり案内書として読む人が大部分だと思う。それで気が付いたことを二、三挙げてみたい。

滑降記ということで、著者等が実際に通ったコースを紹介しており、一般的でない所もある。

例えば、No.72、家形山Ⅱで、家形山に上ってからガンチャン落しを下っているが、家形小屋、五色温泉に行くのが目的なら、大根森の上り口の追分から北に回り込むのが一般のコースである。

No.73、一切経山で、微湯温泉に下るコースを沢沿いに取っているが、冬期には危険区域とされ、通常コースは小富士の裾を巻く夏路沿いとなっている。しかし著者の踏査日の四月七日頃は地肌も現れ、残雪の多い沢沿いが滑降に適していたと思われる。

これ等については、著者も文中で、使用に当って注意を述べているので、蛇足と思うが具体例を挙げておいた。ただ概念図は、もう少し詳しいのがほ

しかった。

奥田氏は、吾妻山群の高山開発に反対する、「高山の自然を守る会」の役員として精力的に活躍しており、山を、特にブナを愛する気持が随所ににじみでている。

一九九〇年十二月一日 山と溪谷社
刊 二三〇頁 定価一四〇〇円
(河上鏡治)

山と自然と人間を

愛して

筑木 力著

筆者は本会越後支部の古い会員で、本職は英語の教師。すでに今までに「山とともに」「わが出逢いの山々」「山頂へのみち」の三冊を出している。本書で四冊目、本業のかたわらだからたいへんな努力家と言えよう。筆運びも流暢で、しっかりした内容にもかかわらず読み易い。しかし筆者はかなり個性的な人かも知れない。山や自然、人間を深く愛するが故に、ひとつの哲学とも言える見識が随所にうかがえる。

通読してみると、全編はまさに表題の通りの内容で、山と自然と人間を愛してそのものである。NHK新潟放送局のラジオ第一放送「朝の随想」を中

心に、時に応じて今まで発表してきた作品をまとめたというから、書き下ろしと違っていて、表題はあとでびったりのものをつけたに違いない。

本書は、山を思う、山名を調べる、自然を愛する、山を愛する、山を歩く、山に取り組む、人間を営むの六章からなり、各章に七、八、十数編の随想が納められている。

まず最初の章、山を思うには筆者は里に在っても「心は常に山あり」のようであり、また昨今の百名山ブームもちよびり批判している。次の山名を調べるは一種の「山名考」で筆者の知的探検。自然を愛するは、自然保護に対する見解と環境倫理の確立を叫んでいる。

山を歩くは、人間もテレトリーがあることやFAF体験など興味深い。五章の山に取り組むは、筆者の最も力を入れた所のように、春、夏、秋、冬四季に分けた山行記録が見事にまとまっている。最後の人間を営むは、筆者の本業である英語教師の目を通しての人間学であるようだ。

山やとして是非座右におきたい一本書である。一読をおすすめしたい。

一九九一年三月 B6版 ほおずき書籍(株)刊 本文一八四頁 定価一五〇〇円 (小倉 厚)

創立六十周年記念誌

横浜山岳会編

創立六十周年記念集で「丹沢」「海外的山」「記念事業報告」「六十年史年表」から成っている。

丹沢山塊は当会員にとって手近かで親しみをもった山であり、自分達を育ててくれたホームゲレンデでもある。この丹沢の今昔をメインテーマに取組んでいる。

塔ノ岳山頂の尊仏小屋建設(昭和十四年完成)の経緯や苦勞、各時代の登山の様子、樹木におおわれた美しい丹沢の思い出がオールドメンバー達によって語られ昔日をしのばせている。

今日の丹沢については六十周年記念事業として丹沢の再発見をテーマに一五〇名の会員がどれか一つには参加することを願って年間に十一回各山域・流域で七ルート計画し、六二ルートのトレースした状況が「丹沢今昔」記念登山の記録」として納まっている。「丹沢の魅力」では多数の会員が好きな山や沢そして春の樹の花等を語っている。「丹沢のブナの荒廃」では棚沢の頭にあった美事な枝ぶりの名木「治郎ブナ」がこの十数年で弱りはじめ、ついに倒壊していく様子を偶然にも三人の会員が撮っており、この五

葉のカラー写真は環境汚染の影響を受けている今日の丹沢を如実に物語り、自然破壊の恐ろしさを一目瞭然視覚に訴えている。

「海外の山」ではこの一年間にヨーロッパアルプスに登山隊とスキー隊の二隊を催行し、またチョゴリ、ナンガパルバット、トムール峰の三隊に代表参加、計五隊十五人が活躍した老舗山岳会の気を吐く姿がうかがえ、「六十年史年表」には昭和五年創立から平成元年度までの六十年間の会務・例会山行・会報が二三頁にわたり作表されており、平成二年三月の会報ナンバー六九三号は当会の底力を物語っている。

一九九一年三月 横浜山岳会刊 一九五頁 非売品 (南井英弘)

密偵西に消える

西川一三著

この耳慣れないタイトルは、西川一三著、秘境西域八年の潜行、上巻、下巻、芙蓉書房発行、昭和四十二年から昭和四十三年に発売されたものとの初稿の題名であった。それがこの度、中公文庫より昨年十二月から今年一月までに、上巻、中巻、下巻に原稿通り三千二百枚すべてが初めて上梓された。本人の希望通り、大幅に改定され、

それこそ密偵西に消えるの昔にもどって一本化しスッキリしたものとなった。既刊の芙蓉書房版の各巻は、種々な著名な方々の推薦文がよせられ本会の西堀栄三郎元会長、泉靖一、井上清は羨望と嫉妬を禁じ得ないとまでに評価され、その充実した記録に驚愕し注目を集めたものだ。

その行動は、昭和十八年、内蒙古トクミン廟を出発し、これまで外国人には、未開、未紹介のサンタンジャム(裏街道)をへて東チベットに潜入した。白眉はラマ僧としてレポンス内寺の文化的な生態を最も底辺から考究されていることだ。これまでの探検家や求道僧には見られない対等の立場で、内陸アジアの各民族の比較文化に見られる。最も感動的なのは、青海ムルウスでの激流を泳いで、仲間のヤクの決死の救出であろう。

本書の題名は、西域とあっても私どもの現在知っている地理的範囲とは一寸シフトしている。中巻五〇〇頁一行目のザリーラは、ザリー・ラ、チベット語では山、ラは峠を意味するといふ。北上山地にも峠、神山がある。そのザリー・ラからの眺望に、カンチェン・ジュンガの奥にナンガ・バルバットが望見出来るとあるが、恐らく、チモランマの手前のマカルーあたりではと著者と話したことがある

次代に残そう美しい山と溪

が、いづれにしても、西川一三氏が、西への迫力を切望していた当時の心情が偲ばれて、この表現が具体化したのかも知れない。

この新版を、昨暮の支部長会議時に、山田二郎会長に進呈したら、その礼状に、昭和二十七年頃、加藤、村木、石坂の諸兄と共に、西川一三氏から、ヒンドスタニの講義をうけたことを想い起して居りますとしたためであった。

因みに上巻九八〇円、五八三頁、解説・後藤富男 中巻一一〇〇円、六五九頁、解説・佐藤長 下巻一二〇〇円、六四九頁、解説・佐藤敏彦・金子民雄 さらに『チベット潜行十年』四〇〇円、二九四頁、木村肥佐生著の併読をお奨めしたい。それはお二人は、昭和十八年に同時に潜行し、同じ昭和二十五年に帰国し、その対照的な潜行とフィロソフィの差に興味をそそるものだ。現在、西川一三氏は岩手支部会友で健在である。(佐藤敏彦)

山と神と民族と信仰

丹沢・桂川・足柄

佐藤芝明著

二月十日尊仏山荘の夕食時である。私の隣りに貫祿充分の熟年が座っている。どこかで見たような顔だ思い出せない。「ああそうだ」先日寄贈していただいた『山の神と民俗と信仰』の著者だ、文通はしていたが初対面である。いただいた本に写真が出ていた。

あまりの奇遇に手はかたく握られた。夜の更けるまで話はつきない。

著者は昭和九年丹沢の北麓鳥屋村に生まれ、少年期を山村情緒豊かなこの山里で育ち、三十代後半まで山を離れていたが、再び丹沢の山々に足を向けるようになった。そして思わぬ所で「山神」に出会ったという。

先著『丹沢・桂川・足柄の山の神』では山村民の山に入る敬虔な心から祀った「山神」もすでに忘れ消え去ろうとしているのを発掘し紹介している。今回はその続編ともいふべきものであるが、驚くほどよく歩かれ調査しているのには敬服するのみである。

『山の神の民俗と信仰』は丹沢・桂川・足柄地方に残る山神信仰と民俗(風習や風俗)をとりあげている。さらに他地域との対比をしてわかりやすく説いている。

第一部では山神信仰についての私見をまとめ、第二部は山神にまつわる性風俗をとりあげ、第三部では山岳移動者を山神との関係について追っている。第四部は山間地での農業や林業の移り変わりを、第五部は地元「津久井の酒まんじゅう」の起源についてふれている。第六部では山神と山岳の祭にふれ、尊仏さんの祭について古老の話など、第七部では山神の雑記として玄倉集落からユースンへ越す山神峠の水神・山神の移り変わりなど。

第八部として秦野・伊勢原・足柄など地域別に地図や写真を豊富に使って詳しく紹介している。この書を見るまで丹沢周辺にこれほど多くの山神が祀られているとは知らなかった。またこのような謙虚な心で山に入る先人に頭がさがる。今の人達がこのような心で山に入ってくれたらと。

最後に著者はこう語っている。『山の神の民俗と信仰は私の五十余年の人生の歩みから、山村生活の経験から、成人となつてからの山歩きからまとめたものであります。』

ここでは「山神民俗」に対する研究

ナムチャバルワ峰登山

上高地山岳研究所改築

共同募金に協力しましょう！

調査の楽しみや、山歩きに伴う自然の理解やすばらしさを感じとっていただけに信じています。急速な社会変革や産業経済の変化、自然改造により忘れられたり、祭礼の場を追われたりしている「山神」の保護保存を強く希望すると結んでいます。

平成二年十一月十七日 丸の内出版
二七七頁 定価二〇六〇円

(奥野幸道)

六十歳からの

日本三百名山

田中三郎著

本会々員田中さんは私の主宰する深田クラブの会員でもあるので、満更知らぬという仲ではない。ただ年とってから登山を始めた、今という典型的な中高年登山者だったから、歳に似合わない強引とも思える登山をするので、やや困った存在だなあぐらいにおもっていたのが本音だった。

しかし、この本を読んで私は田中さんを見直した。山に対する心構え、トレーニングや研究、準備おさおさ怠り

ないなかなか謙虚そして慎重な人であることを知った。やはり本会選定の日本三百名山を踏破するには常人とは違う強靱な体力、精神力それに財力を伴った非凡なる人であったのだなあと感服した。

田中さんはそれに正直な人でもあるようだ。よくこの種のもはあたかも自分一人の力のみで登ったように書かれているのが多いが、彼は隠さずプロガイドや精通者の案内によって登ったとはっきり書いている。

本書の内容はまさに題名通り六十二歳安達太良山に始まり佐武流山で終る十三年二ヶ月の記録のエッセンスであるが、具体的な構成は「初めての山」そしてメインとして彼の三百名山踏破中の印象深かった山行「思い出の三百名」の二十一編、「心に残る山々(三百名山番外編)」六編、岳友たちからの「田中さんとともに」十編、「山の教訓」「あとがき」そして巻末に年譜を入れているので単なる山行記録のみではなく、とくに「山の教訓」などは中高年登山者にとって大いに参考になると思う。

田中さんが三百名山を始めた六十二歳、私は今同じ歳だが、とてもこれから三百名山を登ろうという気力も体力もない。たしかに田中さんは川越皓充氏のいう「小柄な怪物おじさん」太田

総次郎氏のいう「勇士」なんだろう。

平成三年五月 東京新聞出版局刊

B6判 本文二四一頁 定価一五〇〇円 (小倉 厚)

報告

熊本支部総会報告

平成三年度の熊本支部総会が、五月十一日(土)午後六時半から、熊本市内のレストラン「ホルン山小屋」で開催された。

昨年までは同時期の日曜日に開いていたが、他の行事と重なることが多く、今年から比較出席率のよい、土曜日の夜に変更した。

総会には会員三十一名(委任十六名を含む)が出席、事務局より提出された議案について慎重審議の結果、いずれも原案通り可決、承認した。

平成三年度の事業計画は次の通り
八月二十四日 山の映画とビールの夕べ

十月十九日(二十日) 秋季例会―背梁

鳥帽子岳山行

一月十一日 新年晩餐会

三月七(八)日 春季例会―万年山山行

三月三十一日 熊本支部報第三号の発行

また平成四年には、支部創立三十五周年を迎えるが、それを記念してカナ

ディアン・ロッキーのトレッキングを行うことが提案され、実現に向けて、今年度から具体的な準備に入ることもあった。

総会終了後、同じ会場で懇親会を行い、なごやかな会員交換が九時過ぎまで続いた。

(田上敏行)

熊本支部春季例会ー傾山

最近、東九州支部から刊行された「大分百山」は、傾山(一六〇二呎)を「山群の他の山に比べ、傾山はさして高い山ではない。しかし、祖母山に対して一方の雄がこの山であり、登山者の人気は祖母山に匹敵する。というのも、岩峰群が登高の意欲をそそるからであろう。岩峰は西側に絶壁となつて連なり、北側からだ山頂部が傾いて見えることから山名が生まれた」と記している。

「春の陽気に誘われて」という訳でもないが、今回は少し遠出して、この傾山に出掛けることになった。三月二十四日午前八時、前夜宿泊した高千穂の国民宿舎を出発。一行十四名は車を連ねて国道二一八号線を東へ十^きほど走り、日之影町へ。「傘をさすと空が見えない」といわれるほどの谷あいの町で、日之影とはよく名付けたもの。

〔自然保護随想〕

山と人と(蔵王から)

『山』五四三号で、村木副会長の、自然保護委員会における講演要旨を読み、頷かされること、教えられることが多くあった。

私の住む山形でも今、北蔵王のスキー場建設が問題になっている。そこは、山形市および、その周辺住民の水源であるところの馬見ヶ崎川の上流に当たっている。そして、その地域の森林が広範な伐採に晒される恐れがあるとして「馬見ヶ崎川の水源地と北蔵王の自然を守る会」が結成され運動を展開している。私もこの馬見ヶ崎川の畔に添って通勤しているの、その水の流れの源の生の問題に無関心ではいられない。

山を好きな一人として思うことは、自然は人間だけのものではない、と云うごく当たり前のことである。その自然の中に生き、恩恵を受けている多くの動物、植物の一員に過ぎない人間は、自然に対して謙虚な姿勢で接する、あるいは交わるのが本当だと思う。しかし山岳とか森林

ここから日之影川に沿って県道を上流へと向かう。

途中の「見立」は古くからの鉱山で、現在は閉山されているが、かつての繁栄をしのばせる住居跡や作業所跡が見られる。この付近から道の両側の切り立った斜面に点々とミツバツツジの紅紫色の花が見られ、我々の目を楽しませてくれる。やがて県道と分かれ、林

の自然帯に憧れて入る登山者自身が自然を損ってはいないだろうか、無意識に汚してはいないだろうか。幕宮ひとつをとってみても、山に登る人の増えた昨今では、マットの下に敷く草木でさえも、たったこれきりのこと、と云い切れぬ時代になっていると思う。

自然に溶けこんでいるつもりの方々の行為が、どこかで後遺症を残しているかもしれないと思う心。これを持たずに他に向って、自然保護を訴えることができるだろうか、自らに語りかけている。

無関心ではいけないとの気持で、個人として北蔵王の自然を守る会の会員となった。しかし、守る会の主流は、開発反対一辺倒に占められているのを感じる。問題となっている地域の住民の意見は微妙であり、かつ一様ではないが、そこに住み、そこで生きてゆくための率直な考えであると解している。

奥羽山系のこの地帯では、羚羊の捕獲も始まっている。山や溪谷が、永く良い状態の自然であれと願いながら多角的な自然保護の問題点があるがままに受け止め、JACCの会員として、どうしたらよいか模索している昨今である。

(大橋克也)

道をあえぎながら進み、出発から二時間ほどで林道終点の登山口に着く。

うっそうとした原生林だった登山口周辺も、現在は稜線近くまで皆伐採され、かろうじて申し訳程度に登山道の両脇だけ樹林帯が残されている。(数年前、自然保護委員会による現地視察が、こゝで行われた。)

前日まで雨の多かった天候に心配し

たが、誰の「心がけ」がよかったのか、快晴無風の絶好の登山日和。汗ばむほどの陽気のなか、ひと登りで明るいカヤ野の九折越へ出る。ここは大分と宮崎を結ぶ古くからの峠で、ここから眺める傾の岩峰群は素晴らしく、その荒々しい姿が登山者の登高欲をそそる。峠から東へスズタケの切り分け道を抜け、やがて岩混じりの急坂を灌木に

すがりながら登る。高度が上がるにつれて背後の展望が開け、山群の盟主、祖母山の美しい姿が次第に現れてくる。峠から一時間少々で、巨石と枝ぶりのよい五葉松の点在する日本庭園風の山頂に達する。

山頂からの展望は改めて記すまでもなく、拔群で、九州中央部の山々が一望のもとに見渡せる。足元には、目もくらむような傾の岩壁が原生林を裾にまわって、中国の南画のようにそびえ立つ。

ただ残念なのは、比較的自然林が残っている大分県側に比べ、宮崎県側は稜線近くまで伐採され、自然破壊が目に見えて進んでいることである。

近年、この山群の笠松山で、九州では既に絶滅したと考えられていたツキノワグマが射殺され、注目されているが、九州でまとまった自然を残す、この山群の貴重な原生林の保護を願わずにはいられない。

展望と休憩の後、少し陽に焼けた顔をさすりながら、下山の途につく。九折越まで一気に下り、もう一度ゆっくり傾の岩峰群を振り返り、やや傾いた西日の射すなか、長い帰路についていた。参加者 奥野正亥、西沢健一、馬場猛、馬場千代子、佐藤光俊、石井久夫、田上敏行、大木野徳敏、川端浩文、鶴田佐知子、樋口格、樋口洋子、藤本多加

志、池崎浩一 (田上敏行)

北海道山菜山行

後志山地「雷電山」

北海道支部

半年にも及ぶ長かった雪の季節に別れを告げ、ようやく新緑に包まれる爽やかな気候となり、かねて岩内在住の佐々木善民会員から「雷電の竹の子(熊笹の子)の良いがあるから支部山行を組んでみないか」との連絡があり、支部総会前のため会員に周知不徹底ながらも温泉一泊の山菜山行を組み、六月一日夕刻までに雷電湯元へ朝日温泉」に各自集合を決めた。

予定通り札幌から八名、函館から三名、地元岩内から四名の計十五名が集まり、それぞれ到着するやすぐさま先ずは露天風呂や内湯に入った。宿は素泊まりで予約していた湯を上がって早速夕餉に取り掛かった。それぞれザックから出てくるは、美酒嘉肴それにハンディカラオケまでも、特に佐々木氏からの新鮮な蟹・いか・つぶ・蛤などは極上のものであった。夜の更けるのも忘れて飲みかつ語らい、最後は河原の露天風呂に浸りながら缶ビールで閉めを入れて寝床に入った。

翌朝は、昨夜のお天気まつりの甲斐あって上々の晴天、午前六時三十分身

支度を十分整えて宿を出発する。まず新緑の登山道を進むと、左手に「雷電・今西ルート」の標識柱が建っている、これは今日案内役をかつている佐々木氏が、元会長の今西錦司氏が一等三角点の雷電山(標高二二二二尺)に登られる際に丈余の熊笹を刈り分けて整備した登山道の標識であり、その後このルートは「はまなす国体」の山岳競技の会場にも使用されている有名な登山道である。

蟬しぐれの声を聞きながらゆっくり登ること約四十分で雷電峠に着き一服入れた後、登山班と山菜班に分かれた。登山班は横内氏がリーダーとなり六名が元氣よく出発し、山菜班は佐々木氏がリーダーとして九名が竹の子刈りに向かう。例年だと丈余の笹で難渋する藪が、今年はアメダスポイントの補修作業で刈り払いされていて峠から五〇〇分の竹の子ポイントまでは楽に入ることが出来て助かった。竹の子は今までに見たことがないほど太くて、しかも取り切れないほど密生していて、現場に行ったら人以外は信用してくれないほどであり、用意して行ったザックや袋は一時間余で一杯になり、残念だがほどほどに降りる事とした。十時には温泉に下り、また露天風呂に何回も入って、登山班の下山するのを待った。登山班は、十一時四十分登頂し、

澄み渡った青空のもと三百六十度の展望に満喫し、午後二時三十分無事下山した。もちろん登山班にも竹の子をお裾分けしてお互いに楽しみを分かち合って宿を後にした。

参加者 安藤雅子、石井忠雅、石崎貞子、菊地和重、桜井仁、桜居正見、桜居幸子、佐々木善民、高澤光雄、田中初江、平野明、水科行雄、柳田涼子、山本房子、横内泰美

◎平成三年度北海道支部山行計画
①春季山行 後方羊蹄山(真狩コース)
六月二十二日・三日 ロッジ泊往復
②夏季山行 岩手山(柳沢コース)
九月六・八日 温泉泊往復

③秋季山行 雄針山(鈴川コース)
十月十九・二十日 温泉泊往復
・お月見集会 町営八雲温泉

④冬季山行 ニセコアンヌプリ
二月八・九日・十一日 ロッジ泊
・山スキー・ゲレンデスキー
(水科行雄)

第十五回若葉会山行

伊藤主税

本年度の若葉会山行は去る六月八日、九日の両日、東北の七時雨山・稲庭岳にて大成功裡に終了した。それは梅雨期とは思えぬ好天に恵まれた上、さらに岩手支部の心からの歓迎があっ

て果たせたことであり、ここに支部の皆様は謝意を表したく思う。

六月八日 快晴。午前六時 七時雨山荘に到着。しばし休憩の後、岩手支部長佐藤氏による人間味溢れる案内で車之走峠に向かった。峠からは四班に別れ、山荘のオーナーでもある立花会員の先導で、賑やかな春セミの声のなか山頂を目指す。山道の両脇にはフキ・ワラビが群生し、ピンクのタニウツギが随所に色を添えていた。十一時五十分権現山々頂に到着し、昼食とする。山頂からの眺望は素晴らしく、三六〇度のパノラマが楽しめた。南に岩手山、北西遠方かすかに岩木山、北に八甲田連峰と、疎らになった残雪が趣を添えていた。広々とした裾野を眼下に見下ろしながら、初夏の日差しを暫し楽しんだ。

午後一時 権現山々頂を発ち、十分後に七時雨山々頂に着く。この山頂では、去る五月二十七日チョモランマ登頂後、不帰の人となった岩手支部会員の二上純一氏(享年三十九歳)の「冥福を祈り黙禱を捧げた。実は、この山頂にある「第五回日本山岳会集會記念」の碑は、二上氏が単独でかつぎ上げたものであり、それに因んで、岩手支部ではこの山を七時雨二上山と命名したとすることである。ブナの樹林帯をしばらく下ると、急に広々とした草原

にでる。前方になだらかな丘陵、田代山の稜線が薄く霞のかかった午後の青空にくっきりとした線を描いていた。遠くで雲雀がさえずり、カッコーがまた鳴いている。タンポポの綿帽子を蹴散らしながら草原を横切ると、間もなく赤い屋根の我らの山荘があった。

夕刻六時より夜宴が始まる。支部会員の宮・小口両氏の奏でるクラシック・ギターが木造りのキャビンに響き渡り、炭火に焼ける当地産「あしろ短角牛」の煙が絶妙に調和して暖かい雰囲気を出していた。支部差し入れの地酒「鷲の尾」を酌み交わしながらの談笑は、深夜まで続き誠に楽しい一夜であった。

翌九日、またもや快晴。朝八時、山荘を出発海拔七三三メートルの町営キャンプ場までバスで向かう。当日は稲庭岳の開山式とあって、キャンプ場は既に祭り気分であって、華やかでいた。キャンプ場を抜けて二十分も登ると灌木帯に出た。渡る涼風が何とも心地よい。稲庭岳の頂きは、もう目の前であった。

九時四十分山頂に着く。昨日登った七時雨山が南に見える。権現・二上のふた瘤の頂きから西に流れるように裾野が広がり優雅な山谷である。「五月晴眺めてもよし 七時雨」十一時、岩手支部会員の打ち振る手に送られて帰途につく。

この山行のもう一つの目的であったクリーン・キャンペーンはついに果たせずに終わってしまった。なぜならこの山ではゴミがひとつも見つからず、ゴミ拾いの代わりに山菜取りとなってしまう。東北人の山を大切にする心意気に深い感銘を受けて帰京した次第である。

参加者 東京本部五十四名、岩手支部十七名

・会務報告

六月理事会

六月十三日(木)十八時四十分
場所 本会会議室

出席者 山田会長、藤平、松田両副会長、小倉茂、重廣、入澤、小倉(厚)、穴田、石橋、山口、大森、片岡、南川、藤井、大倉、村井、伊丹各理事、中島監事、橋本常任評議員

(委任) 鳴原、西村、湯浅各常任評議員、飯野監事

議事
(1) ナムチャバルワ・山研合同募金の件(橋本)
五月十八日に第一回の募金委員会を開催し、大方の了承を得たが、具体的

その時パートナーによってザイルが切られた……

死のクレバス

——アンデス氷壁の遭難——



J・シン普森著 中村輝子訳
初登攀の成功から一転して骨折、墜落、宙づり、パートナーによるザイルの切断……絶望的な状況に陥ったクライマーの傷ついた肉体と意識が格闘するドラマを迫真的に描く。四六判・定価二〇〇円(税別)

これは、傑出した話といふこととまらない——いや、かつて読んだ信じ難い山からの生還の話の中で、もっとも傑出したものである。豊かな感受性と劇的な性格を示し、彼とパートナーとの極限状況での恐怖、苦しみ、感情の揺れをみごとにとらえた物語である。

●C・ボントンの序文より

現代の冒険 全2冊

上巻 山・極地・河
下巻 海・空・洞窟・宇宙

C・ボントン著 田口二郎・中村輝子訳

A5判変型・定価各一八八円(税別)

岩波書店 東京・千代田・一ツ橋

に募金活動を開始するため、中村太郎、小倉茂暉、石橋正美、橋本清、伊丹紹泰、重廣恒夫、大倉昌身、飯野亨の八名を募金委員会事務局委員に委嘱し六月十七日に委員会を開催した。

会員向けパンフレットには募金要項を付け、早急にお願ひすることにした。なお企業対象の募金も、経団連にお願いし、活動を開始したい。

(2)報告事項：(山田会長他)

①東海支部創立三十周年記念行事には山田会長、松田副会長、神崎、藤井、理事等が出席した。

②ウエストン祭には山田会長以下役員多数が出席したが、終了後の午餐会の席上、安曇村長より、感謝状と記念品代として金一封が、本会宛贈られた。

③アテネ書房より依頼のあった『ヒマラヤへの挑戦』に本会刊行物より転載の件は、承諾し、写真についても貸出することを決めた。

④五月書房より、『山岳』を覆刻したい旨の依頼があったが、本件は過去に四回、他社からの話もあったので、慎重に対応したい。

⑤山と溪谷社より、依頼のあった山岳「65〜66年号」に掲載の、成田安輝氏の「進蔵日誌」の写真転載の件は了承する。

⑥佐伯文蔵氏の葬儀(六月十二日)に

は、藤平副会長が参列、弔意を表した。

⑦岩手支部員、二上純一氏は五月二十七日、北東稜よりチョモランマ峰の登頂に成功後、下山途中、カンシュン氷河側に滑落遭難された。本会は慎んで哀悼の意を表する。

(3)各委員会の運営方針ならびに、新委員の構成について

各担当理事より、夫々説明があり、承認された。これについては別稿、「平成三年度各担当理事の運営方針・新委員の構成について」を参照されたい。(三〜四頁参照)

・ルウム日誌

(6月)

3日	総務委員会、自然保護
5日	青年部
6日	学生部
10日	自然保護
12日	理事会
14日	図書委員会
17日	合同募金委員会、フィルム委員会、総務委員会
18日	資料委員会、自然保護
19日	三水会
20日	女性懇談会
22日	「上高地自然史研究会」
24日	「山岳映画」映写会
25日	自然保護委員会

Books & Videos in the World

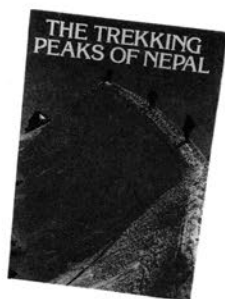
Books

High Asia	by J. Neate	7000m以上の高峰の画期的な案内書。未登峰リスト付	213 P	¥8,800
The Trekking Peaks of Nepal	by B. Oconnor	トレッキング許可で登れる5千〜6千m峰18座	224 P	¥5,200
High Alaska	by J. Waterman	アラスカ三山の主要ビッグルート40を豊富な写真で解説	398 P	¥6,000
Bugaboo Rock	by R. Green & J. Bensen	花崗岩塔が林立するバグブー山群の200ルートをガイド	192 P	¥4,200
Rocky Mountain Rock Climbs	by J. Harlin III	中西部8州の19エリア500ルート	408 P	¥5,800
Mexico Volcanos	by R. J. SECOR	メキシコ登山の案内書	120 P	¥2,650
The Peruvian Andes	by P. Beaud	100本の登攀ルートと40本のトレッキング案内	307 P	¥5,200
Yosemite Climbs	by G. Meyers & D. Reid	1987年に改訂されたヨセミテのクライミングルート図集	450 P	¥5,200

Videos

KONGUR	英国のC・ポントントンら4人によるコングール初登頂	1981年	30分	¥7,800
Everest (The Last Unclimbed Ridge)	1982年春のC・ポントントンらの東北東稜の記録	1982年	53分	¥8,200
The Conquest of Everest	1953年春のE・ヒラリーとテンジンによる初登頂	1953年	78分	¥8,200
Winds of Everest	1984の米国隊による北面からのP・アーシュラーの単独登頂記録	1984年	58分	¥9,200
Out of the Shadow into the Sun	アルピニスト必見のアイガー北壁ノーマルルート登攀	1970年	50分	¥7,800
EL Capitan	エル・キャピタンのノーズを登る4人の姿を追った多数の賞を受賞した名作	1970年	60分	¥9,800
Yosemite Climbing	ヨセミテ渓谷の代表的な美しいクラッククライミングの数々	1986年	60分	¥8,200

- 紹介した洋書、ビデオを限定期間につき取り次ぎます。
- 価格は送料、税込み価格です。ただし円が大幅に変動したときは価格変更する場合があります。
- お申し込みは、書(ビデオ)名、冊(本)数を明記のうえ、郵便振替か現金書留にて、直接小社へお申し込み下さい。
- 船便にて取りよせとなりますので、ご注文者へ届くのは2か月位かかりますのでご了承下さい。
- 洋書、ビデオは書店への注文はできません。



★お申し込み期限 10月末日迄
★ビデオはすべてVHSのみ

白山書房

東京都目黒区駒場4-7-8
☎3485・1309 振替/東京2-29488

26日 海外連絡委員会

27日 科学委員会、学生部

28日 アルパインスキー

6月来室社460名

.....
会員異動

6月

.....
終身会員へ

保坂 一(二九八五)

荒木正弘(五〇三五)

.....
姓名変更

佐藤 巧(八九二六)↓小山田巧

退会

山本信治(八五八〇)

丸山 勝(九七〇七)

物故

吉田俊二(六三六〇) 6・18

秋山幹夫(八八九八) 5・19

タンポチェ僧院再建協力

募金者ご芳名

九四、九五八円(社)日本山岳協会。

一万円ーエーデルワイスクラブ。

七月二日現在累計四四四名、累計金

額五、九二二、二九八円。



☎ 3234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

●恒例ビアパーティー

日時 九月七日(土)十七時より

場所 日本山岳会集會室

会費 二千元

ゆく夏を惜しみ晩秋の山など、飲みながら語らいましょう。

女性懇談会

●初級岩登り講習会

秩父連峰小川山において昨年に引き続き初級岩登り講習会を行います。

初歩的な講習会ですが、少しでもアクティブな山登りを心掛けておられる方はぜひご参加下さい。

日時 十月五日(土)〜六日(日)

宿泊 金峰山荘 費用一万五千元

申込 葉書でJAC指導委片岡迄

(申込次第詳細連絡します。)

指導委・青年部・集會委

●還暦セーター頒布

二年ほど前に、一部の会員の依頼で胸にカンガール・ポケットを付け、それにJACの文字と、ご本人の還暦年号(西暦)を入れた赤いセーターを作り、ご愛用を戴いておりますが、最近このセーターを作った欲しいと言うご

要望が多く聞かれますので、左記要領により製作頒布致すことにしました。ご希望の方は事務局までご連絡下さい。申込書送付申し上げます。

記

資格 還暦過ぎの会員、または近く還

暦を迎えられる会員

価格 一万二千元(送料別)

数量 七十枚

寸法 S・M・L

締切 九月三十日

入澤郁夫

●「山を語る」講演会

K2を始め海外で活躍の相模工業高校教諭の広島三朗さんが、最近に『山が楽しくなる地形と地学』という本を出版されました。そこで今回はその本をテキストとしていろいろと面白い話を聞こうと思います。

左記よりご参集下さい。

日時 十月二十三日(水)午後六時三十分

分

場所 JACルーム集會室

会費 一〇〇〇円(教材費他)

集會委員会

〔予告〕

紅葉の自然を撮ろう

集會委員会およびフィルム・ビデオ委員会では、山歩きをしながらの撮影会を

次のように企画しております。当日はカメラ・ビデオについて初心の方でも撮影出来るようにベテランがお手伝いいたします。多くの方々の参加をお待ちいたします。

日時 十月二十七日(日) 日帰り

場所 山梨県・西沢溪谷

その他 集合場所・人数等、詳細につきましては次号にご案内申し上げます。集会委、フィルム・ビデオ委

編集後記 暑中お見舞い申し上げます

▲八月号を増頁でおとけします。本格的な夏山シーズンの到来、大いに山を楽しんで下さい。しかし、安全登山を祈るや切です。

▲総会記事(七月号)の後遺病か？まだまだ未掲載の原稿が残っています。どうか会務以外の投稿は、広く会員に門戸を開く意味からしてもなるべく短くしていただければ幸いです。(〇)

平成三年八月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十一

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京(326) 四四三三

振替口座 東京三十四八二九番

東京都港区赤坂一三三六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂